

E-17 わが国におけるプラスチック化粧板の構成材料と色柄の変遷(第5報)
京都地区との関連性 神戸女大家政 藤岡一雄

目的 わが国におけるプラスチック化粧板は1936年に京都地区において、藤岡等の研究開発によるもので、その試作試用は京都が中心であつた。以降現在までの地区との関連性を追跡調査し将来性推測の資料を得ること。

方法 その研究開発関係者の協力を得て残存する資料の収集と現状との比較対照による。

結果 主構成材料の塗布紙製造用浸乾燥機は染色加工機等をモデルとし、加圧設備の製作、据付、補修の外製品の加工利用等には京大各教室の指導援助が大きかつた。模様紙の印刷は京都に工場を持つ印刷会社の積極的な協力があり、特に木目柄は市内古社寺の建築材の木目撮影より始まつた。試用は新京極を中心に劇場のドア、柱、銀行のカウンター、レストランのテーブルの外百貨店の家具売場に衝立等——京都在住画家肉筆の日本画の応用——が試販された。1953年京都駅改築の際には待合室の荷置台に試用されたのをきっかけに、国鉄全般に範囲が急速に拡大した。その色柄名にも ぎおん、西陣、室町、みやこ、その外この地区に因んだものが多い。

以上を総括すれば京都の特性——新しいテーマに速やかに取組む進歩性——に加えて、その工芸の伝統を新しい分野に巧みに消化吸収する合理性が、この新しい化学工業製品の開発に大きな原動力となつた。現在は関東、中京地区の生産量の増大と、利用範囲が全国に及んだ為め地区の特色はほとんど失われたものと思われる。